

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 1 3	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Psychological autopsy studies: the role of alcohol use in adolescent and young adult suicides. 心理学的剖検研究: 青年期の自殺における飲酒の影響について	
執筆者	
Giner L, Carballo JJ, Guija JA, Sperling D, Oquendo MA, Garcia-Parajua P, Sher L, Giner J.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Adolesc Med Health. 2007 Jan-Mar;19(1):99-113.	
キーワード	
青年期、アルコール、自殺、系統的レビュー	
要 旨	
<p>目的: アルコール乱用者は自殺念慮を抱き自殺する傾向がある。青年期における自殺とアルコール乱用の関係は複雑である。そこで、青年期のアルコールの乱用と依存の自殺におよぼす影響を心理学的剖検研究(psychological autopsy study)を用いて調べた。</p> <p>方法: PubMed で対象を“adolescents”(青年)及び“all child: 0-18 years”(0-18 歳の子ども)とし、“psychological autopsy”(心理学的剖検研究)をタイトルか抄録に含むものを検索した。</p> <p>結果: 40の記事が条件を満たしていた(条件は英語で書かれている、自殺に焦点を置いている、心理学的剖検研究を用いている、5例以上の自殺例を対象としていること)。これらの研究では20歳未満でアルコールを乱用している者の割合は高かった(範囲は 21.42% から 43.47% であった)。アルコールの慢性または急性の乱用、依存などのアルコールの誤った使用は自殺の要因となっていた。青年期の自殺者ではアルコール乱用・依存の割合が高かった。多くの論文で飲酒と薬物乱用を組み合わせで解析していた。</p> <p>結論: 特に危険性の高い集団を特定し、自殺を防ぐ介入をするために、慢性・急性のアルコール乱用者の割合を明らかにするさらなる研究が必要である。青年期の自殺の危険性を評価するためには、慢性および急性の両方の飲酒状況を把握すべきである。</p>	